

隨泉寺寺報

平成 21 年 (2009 年) 9 月号 第 469 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

秋季彼岸会法要

講師 明栄寺住職 釋野 卓雄師

講題 『共に生きる人生』

苦を生きる

釈尊は説かれました。生まれることは苦であり、老いることは苦であり、病むことは苦であり、死 こともまた苦であると。

苦とは我が意のままにならないという意味だといわれています。なるほど、望んで生まれたわけでなく、生まれ方を選ぶことはできません。ままになるなら老いる人はありません。ままになるなら病む人もありません。ままになるなら死こともなく、死にたいと望むこともないでしょう。

できたものは古くなり、いたんでくる、そして動かなくなると朽ちる。厳然たる道理の中にわたしもいたのです。

憂いある故に努め励むことを、悲しみを して他を思いやることを、苦しみの中から助け合う喜びを、悩みの底からいのちの輝きを見る智慧を、涙の向こうに願われた誓いを本願を聞く信心を学びとるのではないのでしょうか。

この苦悩こそが、人と生まれていのちを知るための土壌なのでしょう。

9月の法座予定

- 9月13日……………掃除 長者原西
- 9月14日昼席午後1時より……………秋季彼岸会法座
- 9月14日夜席午後7時より……………出張法座 長者原西集会所
- 9月15日朝席午前10時より……………主婦の集い おとき
- 9月15日昼席午後1時より……………秋季彼岸会法座
- 9月18日午前9時より……………灯茶会準備
- 9月23日午後7時より……………灯茶会
- 10月 2日午後6時より……………本部役員会

☆ ビアガーデン

今年もビアガーデンを催しました。去年は前住職が往生したときだったので、控えましょうと言うことで中止にしました。去年の分まで元気よく飲むつもりでしたが、あいにく雨模様。しかし楽しい楽しい一夜でした。



親鸞聖人は、憂いを忘れるための薬としての酒の効用を認められました。洋の東西を問わず、酒という飲み物は、生活の豊かな伴侶ともなる反、人を狂わせてしまうこともある両刃の剣として、存在し続けています。

▼公然わいせつだとして、国民的スターが逮捕されたという事件がありました。深夜、都心の公園で全裸になって、大声で叫んでいたのだと……。



▼「プレッシャーはなかった」と、彼は否定していましたが、やはりスターの立場を離れて、文字通り裸の自分に戻りたい願望がどこかにあったのでは。

▼人間にはどうしてもなく心が沈むときがあります。親鸞聖人は悲しみに沈んでいる人には、酒でも勧めて慰めてあげましょうとっておられます。その彼にとって、酒は善き友であったに相違ないが、周囲への影響を思えば、本当に「忘憂の薬」との付き合いは難しい。私も気をつけたいと思います。

☆ 少年少女の集い

8月3日(月)に恒例の行事として、少年少女の集いを開催しました。去年から小学1

年生から6年生まで合同で参加者が51名と沢山参加してくれました。午前中に涼しいときに少し勉強をして仏様の話といのちについてみんなで考えました。「ぶたばあちゃん」という童話でおばあちゃん



がなくなっていく準備をする話です。みんな真剣に考えてくれました。午後からはゲームやレクリエーションで楽しい時間をすごしました。婦人会の役員の方にはお忙しい中をお手伝いいただきありがとうございます。

☆ 御礼

永代経懇志 金 貳拾萬円 岡埕妙子殿 故 岡埕人士様 特 永代経志として

☆ 御礼

門信徒会へ 金 一封 岡埕妙子殿 故 岡埕人士様 香典返しとして

尊いものを仰ぐ

美しいものに感動

私は学生の頃、寄宿舎の火事で丸焼けになり、教員になって二年目、宿直の晩、全国を荒らし廻った放火魔に学校を焼かれ、火事には異常な恐怖心をもっています。ところが、最後校長を勤めた町では学校が無人工化され、宿直も警備員も廃止されていました。それで、私は毎晩夜半に学校を見廻ってから床に就くようにしていました。



ところが、どうにか学校だけは焼かずに退任させて貰えそうだと考えていた退任間際のある朝、若いお母さん方七～八人が「校長先生申しわけありません」と、あわただしく校長室にはいってこられるのです。聞いてみると一年生の子七～八人が、体育館の床下の換気口の網を外して中にはいり、暗がりの中で何回もローソクに火をともし遊んでいたらしいといわれるのです。

それが分かったのは、ひとりの子が、「お母さん、体育館の床下の暗がりの中でローソクに火をともしたらきれーいやったぜ」と、その美しさの感動を訴えたことから、「校長先生は火事を心配して見廻りまでされているというのに……」と、その仲間の子のお母さん方に伝え、びつくりしてやってきてくださったのでした。

はずかしいのは私で、体育館の換気口の網が簡単に外れることさえ気付いていなかったのです。それに、暗闇の中のローソクの光の美しさに感動できる子をかわいいなと思いました。いかにも一年生らしいなと思いました。

しかし、お母さんたちがびつくりしてくださったように、このかわいらしさは確かに恐ろしい危険と隣りあっています。美しい話を聞かせたり、美しい絵を見せたり、美しいメロディにふれさせたり、芸事を習わせたりして、子どもの心情・情操を美しく育てることは大いに必要なことです。

しかし、子どもを育てる道には、偏りがあってはなりません。恐ろしい事件をひき起こした過激派の若者たちは、知的偏りの中であのように育てられたと聞いています。

自転車の車輪を直接ささえている道はばは、せいぜい三センチくらいのものでしょう。では、はば三センチしかない道を自転車で無理に走れば、必ずわが身を破滅させることになるでしょう。

美しい心情を育てるにしても、すぐれた賢さを育てるにしても、ほんとうのものを育てるためには、狭い三センチの道にとらわれていないで、それをささえるはば広い生活の耕やしを忘れてはなりません。実際生活の中で、計画させたり、結

測させたり、失敗したときの原因を考えさせたり、生き方そのものを確かな偏りのないものに育てるなかで、尊いものを仰いだり、美しいものに感動したりすることのできる、豊かな心情を育てることを念じようではありませんか。

☆ 明日の風を憂えず

「明日は明日の風が吹く」という題のドラマがありました。今日さえよければというのんきな考えかと、そのころは思っていました。今思うと、「悔いのない今日を精一杯生きよう。それが、明日はどんな風の吹く明日であろうと、明日もまた精一杯の明日にする道だ」という意味だったようです。

「人生やり直しはきかないが見直しはできる」といった人がいます。今あることの尊さを教えられます。

蝉は夏の盛りを生きながら夏ということを知りません。春を知り、秋を知る人間は、まだ鳴か先からやがて蝉が鳴きだすことを知っています。しきりに鳴いている最中にも鳴き声もうすぐやんでしまうことを見しています。蝉の命のはかなさを知っています。生まれる前も、死んだ後も見ることのできないわたしは、実は自分の人生の意味もわかるはずがないのかも知れません。如来さまの智慧の眼より他ないのでありましょう。

幸いなことに、私たちは如来の智慧を教えとして聞くことができます。如来がお知りになるように知ることはできようはずありませんが、このわたくしにかけられた如来の底なしの慈悲、てしない願いを聞かせていただく時、わかった知ったというのではなく、我が思いを越えた重く尊いのが、廣大無辺なるものの中に確かに抱かれていると、うなづかせて頂くのです。



仏法は廣大過ぎて我々の理解を越えています。経験を積んでも積んでも、知識が増えても増えても腹は立つし、欲は深いし、愚痴も多いことは、幾つ何十になっても一向に治らない。そんなおろそかなわたしの智慧で、そんなさもしいわたしの心でわかるものは仏法ではなかったのです。

ちっぽけなわたしの心にはおさまる筈のない てしく大きな真実、そして悲しいわたしを抱いていて下さる確かな世界。それが仏法だったのです。

☆ 灯茶会



9月23日例年のごとく灯茶会を開催します。庭に沢山のろうそくをつけて灯りを楽しみます。今年は早くから虫の声も聞こえています。秋の夜長、少し ともし火でも眺めて、ゆっくりと虫の音を聞きながら、人生を考えるのもいい時間だと思います。誘い合わせてご参加ください。